Osaka University Knowledge Archive

Title	E.H.エリクソンのジェネレイティヴィティ概念に関する研究-概念形成(1950年代～1980年代)の再構築-
Author(s)	谷村, 千絵
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2005, 31, p. 179-196
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11027
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

E. H. エリクソンのジェネレイティヴィティ概念に関する研究

－概念形成（1950年代～1980年代）の再構築－

谷　村　千　絵

目　次

1．問題と目的
2．臨床家としてのエリクソンとライフサイクル論
3．ジェネレイティヴィティ概念の形成過程
4．結　論

大阪大学大学院人間科学研究科紀要 31：179-196（2005）

E. H. エリクソンのジェネレイティヴィティ概念に関する研究
－概念形成（1950 年代～1980 年代）の再構築－

谷村　千絵

1. 問題と目的

ジェネレイティヴィティ（generativitiy）はE. H. エリクソン（Erik H. Erikson, 1902-1994）のライフサイクル論において「成人期」の調和的傾向を示すものとして、エリクソン自身によって造られた概念である。本論文は、この概念の形成過程を跡づけながら、その意味の変化を明らかにするものである[1]。

エリクソンの理論は、とりわけ 1960 年代および 1970 年代にアメリカ合衆国のみならず日本においても注目され、その理論の学際的性格ゆえに、心理学、社会学、思想、臨床、哲学、人間学、倫理学、宗教学など多様な領域で受容されてきた。ライフサイクル論における「乳児期」の「基本的信頼感」や「青年期」の「アイデンティティ」などの諸概念はとくに広く受容され、精神医学や青年心理学などの諸領域における重要な概念となっている。また、彼のライフサイクル論は、現在でも生涯発達理論の代表として紹介されることが多い。教育学においては、とりわけ人間形成論の領域において、森昭が『遺稿 人間形成論』(1977）でエリクソンのライフサイクル論を取り上げ、やはり生涯発達をとらえる理論として注目している。さらに、森の研究を引き継ぎ発展させる形で、田中毎実（1996a,1996b,2003）は、異世代関係の「相互性」における「大人の成熟」をとらえるものとしてエリクソン理論に関する考察を展開している。また、『エリクソンの人間学』(1993）を著した西平 直は、各学問領域において断片的に扱われることの多いエリクソンの理論を包括的に再構成するとともに、臨床的な人間学的関心からとらえ直し、人間形成論の基礎理論として位置づけている。

ジェネレイティヴィティ[2] について言えば、とくに近年、アメリカ合衆国と日本の心理学の分野において、この概念に注目する研究が多く見られる (Kotre, J. 1996; MacAdams, D.P. & Aubin, E.S. 1998; やまだようこ 1999)。また、宗教学においてもこの概念に関する言及がみられる（Browning, D.1978; Emmons, R.A. 1999)。ジェネレイティヴィティというのはエリクソンの造語であるが、基本的に「生み出すこと」を表し、「次世代を生み育てること」といった意味で一般に理解されている。ただし，エリクソンが 40 年にわたる著作活動を通してジェネレイティヴィティ概念の意味内容を

たびたび変化させているのに対して，今日の諸研究は、それぞれ個別の臨床的関心からこの概念を発展的にとらえ活用するものがほとんどであるといえよう。

とくに際立っているのが，コトレーによる聞き取り調査研究 *Outliving the Self* (1984) のタイトル（生き残る自己）にも表れているが、自己の死の認識・受容とジェネレイティヴィティとを結びつけるもの、人間の象徴的不死性を意味するものととらえるもの（Wakefield, J.C. 1998)、世代サイクルという大きな流れに自己を位置づける感覚としてとらえたりする研究（やまだようこ 1999, 2000, Yamada, 2004）などである[3]。また，アメリカにおける近年のジェネレイティヴィティと成人発達に関する心理学的研究を総括しているマクアダムス／オービン（MacAdams, D. P. & Aubin, Ed de St.）による論文集 *Generativity and Adult Development*（1998）でも、ジェネレイティヴィティを死と結びつけて解釈している。彼らはこの著作の序文においてエリクソンが「私とは、私の死後、残るもののことである」（Erikson, E.H. 1968, p.141）と述べた一文を示し、それとジェネレイティヴィティとを関連づけている。

しかしながら、エリクソンのテキストを厳密に見てみると、この言明は「老年期」の感覚として挙げられているものであり，ジェネレイティヴィティの段階である「成人期」には、それと対応する一文として、「我々とは、我々が愛するもののことである」と述べられていることが分かる[4]。さらに，1969 年のサイコヒストリー研究 *Gandhi's Truth* において、エリクソンは，ジェネレイティヴィティの段階を，「死を忘れなければならない」（Erikson, E.H. 1969, p.399）と形容し，自分の死を忘れるほどエネルギッシュで勢いのあるものとして描いている。このことは、アメリカにおいても日本においても、多くのジェネレイティヴィティ研究において看過されている点として指摘できよう。たしかに、次世代を生み出し、教え育てることに関連するジェネレイティヴィティは、自己という個体の死とまったく無関係なものではない。コトレー(1984)やマクアダムス／オービン（1998)，やまだ（1999 等）に代表される諸研究は、自己の死を超えて残るもの、という視点に限定してジェネレイティヴィティ概念を発展的にとらえているといえよう。

本論文では、これらの先行研究に顕著に見られる個別の臨床的関心から離れ，エリクソンのテキスト全般に見られるこの概念の意味内容を包括的・統合的に理解することを目的とする。エリクソン自身がジェネレイティヴィティ概念をどのように形成し、またどのように変容させていったのか。このことを明らかにするために，以下では，エリクソンの理論形成過程を年代ごとに跡づけ、この概念の形成過程を再構成したい。

2. 臨床家としてのエリクソンとライフサイクル論

ジェネレイティヴィティ概念の形成過程の検討に入る前に，エリクソンと彼の代表的理論であるライフライクル論について，簡単に述べたい。エリクソンは 20 世紀にアメ

リカ合衆国で児童精神分析家，著作家として活躍した。歴史学者フリードマンによるエリクソンの伝記（Friedman, L.J.1999）において詳細に述べられているが，エリクソンの人生は，ドイツからオーストリアへ、ヨーロッパからアメリカ合衆国へ、東海岸から西海岸へ、そしてまた東海岸へと移動を繰り返す人生であった。また、携わった仕事や著作においてはアンナ・フロイトから学んだ精神分析学を基礎とする姿勢を一貫して保ちながらも、その内容は臨床から学問へ、フィールドワークから伝記研究へと多領域にまたがり、境界上を往来するものであったともいえよう。「1950 年以降、発達心理学のなかに芸術家[5] が居座ることになった」（『20 世紀思想家事典』誠信書房、2001、p.11）。これは、アメリカ合衆国で宗教心理学においてエリクソン研究を展開しているドナルド・カップ（Donald Capps）の評である。この評が示すとおり、エリクソンは自らの見解を科学的に裏付けようとはせず、精神分析以外にアカデミックな手法を学ぶこともなかった。彼は自分に見えるものを描写し、解釈する姿勢を貫いたといわれている。

エリクソンの方法論については、日本でも西平直（1993)によって詳細に検討され、すでにその基本特徴が明確にされている。西平によれば、エリクソンの手法は一貫して「臨床的」なものであるという。エリクソンは児童精神分析家であるから、そうした意味ではまず彼自身が臨床家なのであるが、エリクソンのテキストにおいて「臨床」という言葉は、広く「生きた一人の人間を相手にする場面を意味する」ものととらえられるのである。西平によれば、エリクソンの方法論的立場は、「参与観察」、「相対性＝関係性」、「ものの見方」などをキーワードに、次のように読み解くことができるという。すなわち、エリクソンは、「自らのものの見方が、一つのものの見方にすぎないことを自覚しながらものを見るというものの見方」に立ち、「事実はその事実を得るに至ったものの見方に依存する」ということに自覚的になりながら（相対的)、主体的に現実との関係を生き（関係的)、その関係そのものを記述している（参与的観察／観察的参与)、と（西平直 1993, p.21-27)。

エリクソンは自らの著作について、それらは「ものの見方（a way of looking at things)」を提示しているに過ぎないと自己限定している。西平が指摘するように、ここに彼の理論の特徴があるのだが、エリクソンは、さらにこうした態度を読者にも勧めている。たとえば、図 1[6] のエピジェネティック・チャートはエリクソンのライフサイクル論を説明する図としてよく取り上げられるものである（アルファベットは筆者が挿入したものである）が、彼は、「チャートは、それが理解の助けになると思う類の人たちにとってのみ役立つものである」(Erikson, E.H. 1963, p.70）といい、読者にも相対的＝関係的な読みを要求している。エリクソンは、自らの主張が理解されるということは、読者が各自の思考や語彙に照らし合わせてエリクソンの語彙を自分のものとできる、ということだと考え，「チャートはあくまで考えるための道具にすぎない」とし、「このようなチャートは、これを応用し、<かつ>自由に棄て去ることもできる人々が、真剣な注意を向ける場合にだけお薦めしたいと思う」と述べている（Erikson, E. H. 1963, p.270)。

図１　エピジェネティック・チャート

	1	2	3	4	5	6	7	8
老年期 Ⅷ					d		e	統合 対 絶望・嫌悪 英知
成人期 Ⅶ	c	c'	c'	c'	f c'	b c'	ジェネレイティヴィティ 対 停滞 ケア	c'
成人初期Ⅵ					a	親密性 対 孤独 愛		
青年期 Ⅴ					アイデンティティ 対 アイデンティティ拡散 誠実			
学童期 Ⅳ				勤勉性 対 劣等感 適格				
遊戯期 Ⅲ			自主性 対 罪悪感 目的					
幼児期 Ⅱ		自律性 対 恥・疑惑 意志						
乳児期 Ⅰ	基本的信頼 対 基本的不信 希望							

さて，このチャートに示されているエリクソンのライフサイクル論は、人間の生涯を８つの心理社会的自我発達の段階としてとらえるものである。各段階は、それぞれ独自の「調和的傾向 対 失調的傾向」の対立項目として示されている心理社会的葛藤と、その危機の解決によって獲得される人間的な強さ、もしくは人格的活力としての「徳（virtue)」によって特徴づけられる。エピジェネティック・チャートは，ライフサイクル論の構造を端的に示すものとしてよく知られているが，８段階すべての「調和的傾向　対　失調的傾向」と「徳」が対角線上の箇所に示されており，たとえば、「成人期」は「ジェネレイティヴィティ 対 停滞(generativity vs. stagnation)」の葛藤と危機、そして「ケア（care)」[7] という「徳」があるとされている。そして，この図は，その空白箇所にも重要な意味がある点に大きな特徴がある。空白箇所は，各段階がそれぞれの心理社会的葛藤の項目と「徳」のみによって特徴づけられるのではなく、他の諸項目とも意味関連性をもっているということ，それぞれの心理社会的葛藤の項目と「徳」は，ある一つの段階で危機を迎えるが，全ての段階で様相を変えて持続している，ということを示しているのである。本論文では、このエピジェネティック・チャートに注目し、とりわけ、エリクソン自身の言明をチャートの空白箇所に位置づけ（**a**～**f**、各項目の意味関連性を明示していくというアプローチをとりたい。

3. ジェネレイティヴィティ概念の形成過程

とりわけ内容の変化に注目すれば、ジェネレイティヴィティ概念の形成過程は次のように分けて考えることができる。まず、①フロイトの心理性的理論の継承発展によって展開された発達段階論のなかでこの概念が形成され、世代サイクルの視点の導入、「儀式化」概念の導入とともに概念の意味内容が増大する50年代、60年代、②この概念内容が錯綜し始める1969年の中年期のサイコヒストリー研究 *Gandhi's Truth*、③この分裂が明瞭となり、ジェネレイティヴィティが性役割的にも分裂し、かつ、そうした連関のなかで世代間関係から切り離された自己生成という意味合いをも帯び始める70年代と80年代である。以下では，この年代に従って変化の過程を見ていこう。

①3つの系—50年代と60年代

50年代と60年代、エリクソンは主に以下の文献を執筆している。これらにおいては，ジェネレイティヴィティ概念の形成過程の初期として，以下に述べる3つの系の理論的展開を特徴づけることができる[8]。

著書（1950）*Childhood and Society*（邦訳『幼年期と社会』1956）
著書（1959）*Identity and the Life Cycle*（邦訳『自我同一性』1973）
著書（1963）*Childhood and Society* 2nd edition（邦訳『幼児期と社会』1973）
著書（1964）*Insight and Responsibility*（邦訳『洞察と責任』1971）
論文（1966）The Ontogeny of Ritualization in Man
著書（1968a）*Identity：Youth and Crisis*（邦訳『アイデンティティー青年と危機』1973）
社会科学事典に掲載された項目（1968 b）Life Cycle

[第一の系 —「親密性」と脱性化（50年代）]

まず、50年代には、フロイトの理論を脱性化する方向で「親密性」との関連性が明確化していく。こうした方向での理論的展開の方向性を第一の系として捉えることができよう。1950年の著作にジェネレイティヴィティ概念が初めて登場したとき、この概念は、性的関係の帰結としての生殖だけではなく、異性パートナー間の親密で精神的な出会いを鍵として「生み出すこと」一般を意味する概念であることが示された。エリクソンは、とりわけ、アイデンティティから親密性へ、そしてジェネレイティヴィティへという発達の流れを重視し、ジェネレイティヴィティを生殖行為としてだけではなく、異性パートナー間の精神的関係の「親密性」と、その「親密性」の前提となる「アイデンティティ」の発達を不可欠とするものとして構想したのである。エリクソンは，アイ

デンティティの感覚を発達させた者が他者との出会いにおいて「自分を失う」ことを一つの「能力」としてとらえており，それによって真の親密性が達成されると考えていた。そして，それとは対照的に，相互に甘えを許し合うだけの擬似的親密性は，ジェネレイティヴィティの発達を阻害するものとして位置づけられた。

このことをエピジェネティック・チャート上に位置づけてみるなら（図1）、**a** の空白箇所は、「青年期」に経験される「アイデンティティ」の葛藤が「成人初期」の段階においても意味を有すること、また、「成人初期」における「親密性」の葛藤に「アイデンティティ」の問題が不可欠である、ということを示していると考えられる。そして、空白 **b** は、異性パートナーとの関係を特徴づける「親密性」が、やがて次世代との関係においてさらにいっそう脱性化されること、逆に言えば、「成人期」において、脱性化された親密性が「成人初期」における性的パートナーとの「親密性」に根ざすものであることを示していると解釈することができる。

[第二の系—世代サイクルと社会進化（60 年代前半）]

60 年代には、世代サイクルという視点の導入に伴い[9]、異世代間の「相互性（mutuality)」と「徳（virtue)」の形成の関係が理論化される。先行世代と次世代との相互形成的な関係，すなわち世代サイクルのなかで，両者に社会倫理の基礎となる「徳」の形成が促される，というものである。この理論的発展過程を第二の系ととらえることができる。ジェネレイティヴィティ概念は「教えること」や「組織の駆動力」としての意味を含むようになり、また、社会進化を支え促進する要として位置づけられた。さらに、産児制限の技術に伴い、選ばれて生まれたすべての子どもに十全な発達を保障する全人類的ジェネレイティヴィティといった、優生学的な傾向も見られた。「相互性」や「徳」の発達と関連して、エリクソンがジェネレイティヴィティの未発達の理由として挙げることに、「乳児期」で獲得されるべき「基本的信頼感」の欠如がある。このことをエピジェネティック・チャートと関連づけるなら、「乳児期」の「基本的信頼感」の上に連なる空白は、やがて「成人期」に至って、「基本的信頼感」が再び重要な意味をもつようになり、そして新しい形で——ジェネレイティヴィティを構成し、また支え、あるいは阻止する要素として——問題となることを予示しているといえるだろう（図1の **c**)。また（**c'**）は、他の全ての諸項目についても同様に、それぞれが過去での経験を積み重ねて成人期に至っていることが読み取れるのである。世代サイクルという視点のもとでは、チャートに示したこの **c** および **c'** は、それぞれに積み重ねてきた「徳」が、成人の「ケア」、ならびにジェネレイティヴィティを通じ、次世代の子ども時代のそれぞれの「徳」の萌芽となることを予示していると見ることもできる。

[第三の系—儀式化（60 年代後半）]

60 年代後半には、比較行動学から「儀式化」概念が導入され、ジェネレイティヴィ

ティにおける社会様式（モード）の重要性が確認されることになる。こうした発展系列を第三の系と呼ぶことができる。エリクソンは、人間の心理社会的自我発達が、文化的・歴史的・社会的に「儀式化」された「相互性」の型（儀式）に参加することによって進みゆくことに言及し、成人を「儀式施行者」として、そして同時に、「儀式施行者」として「儀式化」された存在として提示した。ここでは、ジェネレイティヴィティが、個人の主体性や能力を超えて、儀式や社会制度といった社会様式（モード）によって支えられ、強化されるものでもあることが明示される。

50年代、60年代の見解の変化を特徴づけるこれら3つの系は、単に時系列的な整理ということだけではなく、エリクソンの視点がジェネレイティヴィティに関して、個体発生的発達から関係発達へ、そして社会様式(モード)という新たな軸の設定というように変化し、それとともに概念内容が全体としてより多様かつ複雑になっていったことを示している。とくに、世代関係に伴うアンビヴァレンスの克服や「相互性」の回復について、はじめは精神分析学的啓蒙の発想を基盤とする「親密性」に解決が求められていたものが、その後、ケアなどの成人個人における「徳」の力に、最後には儀式という社会様式（モード）に求められるようになることも明らかになる。これらの3つの系を総合して見た場合、ジェネレイティヴィティ概念は、社会進化論的な思想傾向とともに，60年代末にひとまず理論的に完成したといってもよいだろう。

②ジェネレイティヴィティ概念の展開と錯綜—*Gandhi's Truth*（1969）

しかしながら、ジェネレイティヴィティに関して60年代にまでに展開された議論は、1969年のサイコヒストリー研究 *Gandhi's Truth*（邦訳『ガンディーの真理』1973）において、インドの父と呼ばれたマハトマ・ガンディー（Mohandas k Gandhi,1869-1948）の人生に照らし合わせることで、新たに統合的・発展的にとらえられると同時に、その矛盾点や盲点を露呈することにもなった。統合的・発展的にとらえられた点としては、「相互性」や世代サイクルを支える儀式を施行する者としての成人には、「自分を忘れる」とともに「死を忘れ」、「世界を維持」し「現実に奉仕する」という側面があることが明示された。ジェネレイティヴィティに関する先行研究では、この概念をむしろ積極的に個人の死と結び付けて考察するものが多い点は先に触れたが，エリクソンは，ガンディーの中年期を描出するにあたって，「中年の男女は、彼ら自身と同じ種の生命を維持するために死を忘れる一時期を、本能と習慣によって＜割り当てられている＞（Erikson, E.H. 1969, p.400）」と述べている。

さて、矛盾点や盲点としては、ジェネレイティヴィティが、エネルギッシュであるが故の無反省さを併せもち、負の側面の世代間継承の問題を未解決のままにしてしまうということ、一見理想的に見える創造的ジェネレイティヴィティですら、必ずしも暴力性やアンビヴァレンスを克服するものではないということが明らかになった。とくにエリクソンは、ガンディーとその父、そしてガンディーとその息子との関係に「呪い」の世

代間伝達をみてとっている。それによって、「成人期」において過去の人生段階における諸葛藤を克服し様々の「徳」を統合していなくても、悪循環という意味でジェネレイティヴィティが成立してしまうという、社会進化論的傾向に矛盾する結論が導かれたといえよう。また、非暴力・不服従という新たな「相互性」の型を創造し、英国からのインド独立を導いた偉大な人物ガンディーですら、非暴力の実践の中で、実際には身近な他者への暴力性を拭い去ることができなかったという現実も示される。これらの問題群は、上述のエリクソン理論の3つの系の調和的統合をポジとした場合、ちょうどそのネガとして、アンビヴァレンスやジレンマに満ちた関係性の現実を描き出したといえよう。

③ジレンマとの取り組みと分裂—70年代と80年代

70年代および80年代になると，エリクソンはジェネレイティヴィティや成人について、積極的に議論を展開する。この時期の主な著作には次のようなものがある。

講演(1972) Play and Vision, *Toys and Reasons*（1977；邦訳『玩具と理性』2000）
講演（1973）*Dimensions of a New Identity*（1974；邦訳『歴史の中のアイデンティティ』1979）
シンポジウムでの発表(1975) Reflections on Dr. Borg's life cycle, *Adulthood*（1978）
論文（1980a）Themes of Adulthood in the Freud - Jung Correspondence
（邦訳「フロイト - ユング往復書簡における＜大人であること＞という主題」1991）
論文（1980b）On the Generational Cycle
インタヴュー記事（1981）On Generativity and Identity
著書（1982）*The Life Cycle Completed*（邦訳『ライフサイクル、その完結』1989）

1972年の講演記録をまとめた原稿において、エリクソンは *Gandhi's Truth* において明らかになったジェネレイティヴィティの矛盾点や盲点を理論に組み入れようと，ジェネレイティヴィティに関連する「拒否性(rejectivity)」という概念を作り出し、能動的なかかわりの負の側面を「不協和傾向」として心理社会的発達理論に組み込もうとした。また、「儀式化」に暴力性を昇華する「遊戯性」という概念を結びつけることによっても、一応の理論的再構成が行われている。しかしながら、エリクソンは、その後の著作において、再構成したはずのこの理論にはほとんど依拠していない。むしろ、人間の人生後半における自己探求、自己の創造性という観点から、ジェネレイティヴィティに新しい要素をつけ加えていくのである。

まず、エリクソンは、1973年のジェファソン講演において、理想を体現する成人性の追求を示唆した。しかしながら、これは示唆にとどまり、彼自身がそうした成人性の追求を行うことはなかった。その後、1975年、ベルイマンの映画『野いちご』の解釈

において、エリクソンは、異世代関係を「老年期」における新たなアイデンティティ形成の契機としてとらえる視座を打ち出した。とくに、この作品の解釈をエピジェネティック・チャートに関連づけるならば、「老年期」の段階の空白において、「老年期」の「統合 対 絶望」の葛藤とともに、この段階における新たな自己探求（**d**）が、異世代関係や、自分が行ってきたこと、生み出してきたこと（**e**）への回顧として、相互に関連しあいながら進みいく様子が細かく描かれているといえよう。また、1980年、フロイト-ユングの往復書簡の解釈においては、ジェネレイティヴィティ概念の新たな意味の一つとして、アイデンティティ発達に関連する「自己生成(self-generation)」という要素を付加している。かつてジェネレイティヴィティへの発達を阻止するものとして挙げられた「二人の孤独」という閉鎖的な「擬似的親密性」は、「自分を失う」ことを互いに要求しない甘えあう関係として否定的にとらえられていたが、ここでは同じものがむしろ「創造的親密性」としてとらえ直される。そして，「自己生成」というポジティヴな面に対して，排他的でネガティヴな「拒否性」という傾向が不可避であることを指摘しながらも，創造性が発揮されるためには，両者はむしろ弁証法的な関係にあるということが明示される。エピジェネティック・チャートで見るならば、「成人期」における「アイデンティティ」や「親密性」、すなわち図1の**f**、**b**の解釈が大きく変化したことが分かる。「アイデンティティ」（**f**）について言えば、かつて「自分を失う能力」や、「自分への関心を忘れること」として特徴づけられていたものが、それまでのアイデンティティを受け継ぎながら新しいアイデンティティを模索していく「自己生成」という解釈に変化している。「親密性」（**b**）については、以前は真の「親密性」が強調され、そうした関係性が次世代や社会組織などへと広がることに特徴があったのに対して、ここでは「二人の孤独」という閉鎖的な「親密性」を、「自己生成」に不可欠な「創造的親密性」として解釈する方向が打ち出されている。

70年代、80年代において、ジェネレイティヴィティ概念へのエリクソンの関心は、「相互性」や「世代サイクル」といった側面から、自己のアイデンティティ探求、すなわち「自己生成」の側面へと移っていった。エリクソンは、フロイトとユングの関係に見られる「拒否性」を、彼らの「自己生成」および創造的な仕事の重要な契機として位置づけている。このように、暴力性を生み出す危険性をも孕むジェネレイティヴィティから、「相互性」の側面を切り離すことによって、*Gandhi's Truth* において明らかになった創造性と暴力性のジレンマはもはや問われなくなる。他方で注目されるのは、60年代に基本的な輪郭を獲得した、「相互性」や「世代サイクル」の要としてのジェネレイティヴィティは、映画やフロイト-ユング往復書簡の解釈の中で「女性的なもの」として特徴づけられていることである。エリクソンは、一方では他者に対する「拒否性」を不可避的に伴う創造活動への没頭を成人男性のジェネレイティヴィティの特徴としてとらえ、他方では「相互性」の回復を目指す関係志向的なジェネレイティヴィティを女性的なものとしてそれから切り離したのである。エリクソンは、そうすることでジェネレ

イティヴィティに伴うジレンマを回避しようとしたといえよう。

4. 結　論

本論文では、以上のように、ジェネレイティヴィティ概念の形成過程を、①50 年代、60 年代、②*Gandhi's Truth*（1969）、③70 年代、80 年代の 3 つの時代に分けて考察した。

50 年代、60 年代においては、生物学的な性（sex）の側面を脱性化する方向で考察が展開されたが、晩年には、解決しえない関係性のアンビヴァレンスやジレンマから脱する手立てとして、性役割（gender）が利用されていた。エリクソンの発達理論が男性中心的で性役割に関してステレオタイプ的であることは、すでにギリガン（Gilligan, k.1982）を中心にフェミニズムから多くの批判が寄せられている。たしかに、彼が、予定調和的な「相互性」の原型を母子関係に求め、負の世代間伝達の相克的な関係を父子関係においてのみ考察している点には、ステレオタイプ的な役割解釈が反映されているといえる。最終的にジェネレイティヴィティを男女の性に振り分けて考察している点にも、性役割に対してステレオタイプ的な傾向が窺えるといえよう。

とはいえ、エリクソンのジェネレイティヴィティ概念の形成過程の到達点がステレオタイプ的な性役割の主張にあるとみなすことは適切ではない。エリクソンは、性役割について理論的な根拠を示しているわけではなく、彼自身のもつ素朴な性役割イメージが反映されているにすぎないからである。その根底には、*Gandhi's Truth* において明らかになった問題、すなわち、異世代間の関係性において個人の主体性のみでは解決しえないジレンマの問題、また「相互性」に創造性と暴力性とのジレンマが伴うという問題があった。ジェネレイティヴィティが性役割に振り分けられたのは、これらをあえて解決しようとする模索から生じた一つの帰結であると見るべきであろう。

本論文は、エリクソンのテキストの内容をエピジェネティック・チャートの空白に位置づけるアプローチをとりながら、臨床的関心からではなく理論研究として、ジェネレイティヴィティ概念の形成過程を再構成するものであった。エリクソンは、ジェネレイティヴィティについて、性、親密性、世代サイクル、徳、社会進化、儀式化、創造性、自己生成、アンビヴァレンス、ジレンマ、拒否性、暴力性など、さまざまなファクターに関連させて考察を展開したが、それに応じて、ジェネレイティヴィティ概念の内容が多様化し、またこの概念をとらえる文脈が複雑化していった過程が明らかになった。そのなかでも、とくにこれまでのジェネレイティヴィティ研究でほとんど言及されていない点として、ジェネレイティヴィティの「自己の死を忘れる」という側面、「儀式化」などの社会様式（モード）との本質的な関係、関係性のジレンマをめぐるエリクソンの模索等を改めて確認することができた。

本論文で明らかになったジェネレイティヴィティ概念の形成過程は、葛藤や危機やジ

レンマを解決しえず、統合しえないジレンマを抱えた存在としての成人、社会の形成や維持、次世代の育成にあたって矛盾を抱え込まざるをえない成人の姿を、結果として描き出しているといえるだろう。そうした意味で、本論文は、ジェネレイティヴィティ概念が単純に成人の幸福感や生きがいを表すものではないことを明示するものである。これは、エリクソン理論の予定調和的なイメージを覆すものであると思われるが、しかしながら、エリクソン自身は社会様式（モード）や男女の性役割などに問題の解決を求めることで、このジレンマを回避しようとしたとも言える。この点に関してさらに考察を深めていくためには、彼の理論形成を歴史的観点からさらに詳細にとらえることや、あるいはジェネレイティヴィティ概念を具体的に臨床的観点から検討することも必要となろう。理論研究としての本論文は、そうした発展的研究の基礎を成すものであるといえよう。

注

1）本論文は，2003年度に大阪大学に提出した博士論文に加筆・修正を行ったものである。

2）Generativityを日本語でどのように表現するかという問題について，本論文では，ジェネレイティヴィティというカタカナ表記をとりたい。すでにこの語は，訳本等において「生殖性」や「生成力」，「生み出す力」等，さまざまな訳出が試みられてきた。その妥当性と問題点については，拙論（1999）でも論じたように，この語のもつポリフォニックな側面を一面的に理解してしまうことが避けられず，近年ではカタカナ表記が用いられることが多いといえよう。その場合，「ジェネラティヴィティ」という表記も多く見られるが、本論文では、「ジェネレイティヴィティ」としたい。英語の発音では<ra>の部分は「ラ」と「レイ」の中間のように聞こえるので、どちらでもよいと思われるが、この言葉の語源であると思われるgenerate（ジェネレイト）、generation（ジェネレイション）、generative（ジェネレイティヴ）などの語を連想させやすくするためには、むしろ「ジェネレイティヴィティ」と表記することが適切であろう。

3）このような解釈は、日本の内閣府のホームページに、高齢化社会対策の有識者会議の議事録において、「老年期の生きがい」を示すものとしてエリクソンの「ジェネラティヴィティ」概念を挙げる調査報告が挙げられていることにも表れているといえよう。この議事録には、以下のように述べられている。「青年期の＜アイデンティティの危機＞で有名な心理学者エリクソンは、中高年期になると＜ジェネラティヴィティ(generativity)＞の危機に陥ると述べている。世代を育み、つくり上げてきた過去からの伝統、文化をうまく次世代に引き継いでいけないと人生の停滞感、無力感に陥る。それを可能にする力が＜ケア（care）＞の力であり、世代交流の中でケアの力を発揮することで最終的には＜英知の統合に至る＞というのがエリクソンの話である。そういうイメージの仕組みをうまくサポートしていくことがポジティブ・エイジングになると考える。」この説明は、エリクソンの理論について要領よくポイントを整理しているように見えるが、しかしこれは、老年期から振り返ってジェネレイティヴィティをとらえる発想である。たしかに、そうした発想は臨床の場面では有意義であるかもしれない。しかしながら、概念の検討

を目的とする本論文では、そうした目的的態度とエリクソンが概念化したジェネレイティヴィティとの差異を明らかにしていくことになるだろう。

4）この「私とは、～である」という定式化された文は、1968 年に出版された *Identity：Youth and Crisis* (1968a；邦訳『アイデンティティ―青年と危機』1973)という論文集のなかの Life Cycle：Epigenesis of Identity と題する論文のなかにある。[アイデンティティのエピジェネシス]という副題のついたこの論文において、エリクソンはライフサイクルの各段階で「私（Ｉ）」の感覚がどのように違ってくるのかということを考察するために、それぞれの段階において「私とは、～である」という定型文を考えている。たとえば乳児期では「私とは、私がもっている希望のことであり、私が与えられる希望のことである」、遊戯期では「私とは、創造可能な将来の私のことである」、と。そして、「成人初期」と「成人期」については、この時期において「私（Ｉ）」は「我々(we)」に変えられる必要があるとした上で、「我々とは、我々が愛するもののことである」とされているのである。エリクソンが、「私とは、私の死後、残るもののことである」という一文を挿入しているのは「老年期」で、「ものごとや人々の世話をやいてきた老人、人の親であり、事物や観念を生み出してきた者としての喜びや悲しみに適応してきた老人」の感じる「私（Ｉ）」についての箇所である。これは、正確には「老年期」におけるジェネレイティヴィティの感覚を示しているといえるだろう。

5）エリクソンは、自分の師として誰を挙げるかという質問に対して、次のように答えている。「私はドイツで大きくなり、そこで詩人や芸術家に学びましたが、結局、それは一時的な師にすぎませんでした。私の場合、それは芸術的な才能を生かす道を探していたのだと思いますが、その後、フロイトは私が出会った中でもっとも創造的な人物となり、私は彼のサークルに迎え入れられたのです。ご存知のように、フロイトは私の養父と同じく医者であり、著述家でもありながら、また芸術に深い造詣のあった人物でした」(Erikson, E.H. 1981, p.260)。すでに指摘されてきたことであるが、精神分析はエリクソンにとって一つの芸術的活動の方法であったのだ。

6）エリクソンの著作の多くの訳本において，エピジェネティック・チャートもまた日本語に置き換えられているが，本論文では，それらを参考にしながら，*The Life Cycle Completed*（Erikson, E.H. 1982）の Extended Version（エリクソン没後，妻のジョアンによって 1997 年に出版された増補版 pp.56-57）に掲載されているものを，筆者が独自に日本語に置き換えて作成した。

7）なお、エリクソンの care 概念は、従来「世話」や「はぐくみ」と訳され、または「ケア」と表記されてきた。本論文においては、「ケア」という訳語を当てたい。エリクソンの care 概念については拙稿（2000）でも考察している。そこでは、この概念の訳語の問題に触れ、エリクソンのケア概念は、成人の「自己へのまなざし」と「他者への関心」とが交差するところにこそ生じるものであるとして、「配慮」と訳すことを主張した。しかしながら、これは、エリクソンが精神分析の手法によって「自己観察的になることによって思慮分別を身につける」ことを「啓蒙」と呼んでいた（Erikson, E.H. 1963, Chapter 11）こととの概念的混同の結果導かれた解釈であったといえる。エリクソンのテキストから、そうした解釈をすることそのものは可能であると思われるが、しかしながら本論文において示している三つの系や、70 年代以降の見解も含めて考えると、こうした解釈は一面的であったといわざるを得ない。そのため、本論文では、訳語を改め、ケアと

いうカタカナ表記を用いることにした。近年、エリクソンのテキスト以外で、教育学などの臨床科学においてケア概念は、新たに注目されている（Noddings, N. 1984, Mayeroff, M. 1971, Gilligan, C. 1982, 広井良典 1997, 鷲田清一 1999 など)。これらの議論においてこの語を「ケア」と訳すことはほぼ定着している。また基本的にこの語を「関心」ととらえる点では、エリクソンの用語としての care もそれらの議論との共通基盤をもつと判断し、本論文においてもカタカナ表記をとることにした。

8）1950 年代から 60 年代前半までの概念形成の詳細については，拙論（2004）にまとめている。

9）エリクソンの発達理論に世代サイクルという視点が導入され，関係論としての射程の広がりが得られたことについては，柳沢（1985）がすでに詳細に論じている。

参考文献

Aubin, Ed de St. & MacAdams, D. P. & Kim, T. 2004 the *Generative Society,* American Psychological Association

Browning, D. 1978 *A Normative Image of Man,* Childhood and Selfhood, Associated University Press

Capps, D. & Capps, W. H. & Bradford, M. G. 1977 *Encounter with Erikson : Historical Interpretation and Religious Biography*, Scholars Press

Coles, R. 1970 E. *H. Erikson: the Growth of His Work,* An Atlantic Monthly Press Book, 鑪幹八郎訳『E.H.エリクソンの研究 上・下』ぺりかん社 1980

Coles, R. 2000 *The Erik Erikson Reader,* W. W. Norton

Emmons, R. A. 1999 *The Psychology of Ultimate Concerns: Motivation and Spirituality in Personality,* The Guilford Press

Erikson, E.H. 1937 Configurations in Play— Clinical Notes, *A Way of Looking at Things,* Schlein, S. 1987, W. W. Norton

Erikson, E.H. 1950 *Childhood and Society,* W. W. Norton, 草野栄三良訳『幼年期と社会』日本教文社 1956

Erikson, E.H. 1958 *Young Man Luther,* W. W. Norton 大沼隆訳『青年ルター』1974 (絶版) 西平 直訳『青年ルター』みすず書房 2003

Erikson, E.H. 1959 *Identity and The Life* Cycle, W. W. Norton 小此木啓吾訳『自我同一性』誠信書房 1973

Erikson, E.H. 1962 Reality and Actuality, *Journal of American Psychoanalysis Association,* Vol. X, No. 3, pp.451-473.

Erikson, E.H. 1963 *Childhood and Society (2nd Ed),* W. W. Norton, 仁科弥生訳『幼児期と社会』みすず書房 1973

Erikson, E.H. 1964 *Insight and Responsibility,* W. W. Norton, 鑪 幹八郎訳『洞察と責任』誠信書房 1971

Erikson, E.H. 1966 The Ontogeny of Ritualization in Man, *A Way of Looking at Things,* Schlein, S. 1987, W. W. Norton

Erikson, E.H. 1968a *Identity: Youth and Crisis,* W. W. Norton, 岩瀬庸理訳『アイデンティティ 青年と危機』金沢文庫 1973

Erikson, E.H. 1968b Life Cycle, *The International Encyclopedia of the Social Sciences 9,*

Macmillan and Free Press, p.286-292.

Erikson, E.H. 1969 *Gandhi's Truth,* W. W. Norton, 星野美賀子訳『ガンディーの真理 1・2』みすず書房 1973

Erikson, E.H. 1974 *Dimensions of a New Identity,* W. W. Norton, 五十嵐武士訳『歴史の中のアイデンティティ ジェファソンと現代』みすず書房 1979

Erikson, E.H. 1976 Reflections on Dr. Borg's life cycle, *Adulthood,* W. W. Norton

Erikson, E.H. 1977 *Toys and Reasons,* W. W. Norton, 近藤邦夫訳『玩具と理性』みすず書房 2000

Erikson, E.H. 1978 *Adulthood,* W. W. Norton

Erikson, E.H. 1980a Themes of Adulthood in the Freud-Jung Correspondence *Themes of Work and Love in Adulthood,* Harvard university Press,西平 直訳 「フロイトーユング 往復書簡における<大人であること>という主題」『みすず』366, 368, 369, 1991

Erikson, E.H. 1980b On the Generational Cycle, *International Journal of Psychological Analysis,* Vol.61, pp.213-223.

Erikson, E.H. 1981 On Generativity and Identity, *Harvard Educational Review,* vol. 51-2, pp.249-269.

Erikson, E.H. 1982 *The Life Cycle Completed,* W. W. Norton, 村瀬孝雄・近藤郁夫訳『ライフサイクル、その完結』みすず書房 1989

Erikson, E.H. 1986 *Vital Involvement in Old Age,* W. W. Norton, 朝長生徳・朝長梨枝子訳『老年期』みすず書房 1989

Erikson, E.H. & Erikson. J.M. 1997 *The Life Cycle Completed: Extended Version,* W. W. Norton, 村瀬孝雄・近藤郁夫訳『ライフサイクル、その完結<増補版>』みすず書房 2001

Erikson, K. 2004 Reflection on Generativity and Society: A Sociologist Perspective, *The Generative Society,* Aubin, de St. & MacAdams, D. P. & Kim. American Psychological Association

Erikson. J.M. 1988 *Wisdom and the Senses,* W. W. Norton

Friedman, L.J. 1999 *Identity's Architect,* Scribner, やまだようこ・西平 直監訳『エリクソンの人生 上・下』新曜社 2003

Gilligan, C. 1982 *In a Different Voice: Psychological Theory and Women's Development,* Harvard University Press, 生田久美子他 訳『もうひとつの声』川島書店 1986

広井良典 1997『ケアを問いなおす—<深層の時間>と高齢化社会』筑摩書房

Kotre, J. 1984 *Outliving the Self,* W. W. Norton

木田元・阿部美哉他 監修 2001『20 世紀思想家事典』誠信書房 Edited by Devine, E. & Held, M. & Vinson, J. & Walsh, G. 1985 *Thinkers of the Twentieth Century: A Biographical and Critical Dictionary,* St. James Press

MacAdams, D.P. & Aubin, Ed de St. 1998 *Generativity and Adult Development, American* Psychological Association

MacAdams, D.P. & Logan, R.L. 2004 What is Generativity? *The Generative Society,* Aubin, Ed de St. & MacAdams, D. P. & Kim, T., American Psychological Association

Mayeroff, M. 1971 *On Caring,* Harper & Row,田村貞・向野宣之 訳『ケアの本質—生きることの意味』ゆみる出版 1987

森 昭 1977『人間形成原論 遺稿』黎明書房

西平 直 1985「E.H.エリクソンの virtue 概念－発達的視点と規範性の問題」『教育学研究』第

52 巻第 2 号, pp.214-223.
西平 直 1993『エリクソンの人間学』 東京大学出版会
Noddings, N. 1984 *Caring: A Feminine Approach to Ethics & Moral Education,* University of California Press, 立山善康他 訳『ケアリング』晃洋書房
讃岐幸治・田中毎実 1995『ライフサイクルと教育』青葉図書
Schlein, S. 1987 *A Way of Looking at Things: selected papers from 1930 to 1980,* W. W. orton
田中毎実 1996a「人間形成論の内容的展開の試み－ライフサイクル論と相互形成」岡田渥美編『人間形成論－教育学の再構築』玉川大学出版会
田中毎実 1996b「教育責任の人間形成論のために」岡田渥美編『教育責任に関する人間形成論的総合研究』文部科学省科学研究費補助金平成 5・6・7 年度（総合研究 A）研究成果報告書
田中毎実 2003『臨床的人間形成論へ　ライフサイクルと相互形成』教育思想双書 3　勁草書房
谷村千絵 1999「E.H.エリクソンのジェネレイティヴィティ概念に関する考察―ライフサイクルとかかわりのダイナミズム―」『教育哲学研究』教育哲学会 第 80 号, pp.48-63.
谷村千絵 2000「E.H.エリクソンの＜care＞概念に関する考察―他者への関心と自己へのまなざし－」『大阪大学教育学年報』大阪大学人間科学部教育学研究室 第 5 号, pp.1-13.
谷村千絵 2003「『必要とされること』の位相―小学校でのアシスタント・ティーチャー体験を通して―」『大阪大学教育学年報』大阪大学大学院人間科学研究科教育学系 第 8 号, pp.75-86.
谷村千絵 2004「E.H.エリクソンのジェネレイティヴィティ概念に関する考察―1950 年代から 1960 年代前半までの見解の変化―」『大阪大学教育学年報』大阪大学人間科学研究科教育学系 第 9 号 ,pp.21-31.
Wakefield, J.C. 1998 Immortality and the Externalization of the Self: Plato's Unrecognized Theory of Generativity, *Generativity and Adult Development,* MacAdams, D. P. & Aubin, Ed de St., American Psychological Association
鷲田清一 1999『「聴く」ことの力―臨床的哲学試論』ＴＢＳブルタニカ
やまだようこ 1999「喪失と生成のライフストーリー」『発達』第 79 号、ミネルヴァ書房
やまだようこ 2000『人生を物語る』ミネルヴァ書房
やまだようこ 2001「エリクソンの子どもたちと生成継承性」『教育学年報 8　子どもの問題』世織書房
Yamada, Y. 2004 The Generative Life Cycle Model: Integration of Japanese Folk Images and Generativity, *The Generative Society,* Aubin, Ed de St. & MacAdams, D. P. & Kim, T. American Psychological Association, pp. 97-112.
柳沢昌一 1985「E.H. エリクソンの心理社会的発達理論における「世代サイクル」の視点」『教育学研究』第 52 巻第 4 号, pp.396-406.

A study on E. H. Erikson's Concept of Generativity
---Reconstruction of its conceptualization from 1950's to 1980's---

Chie TANIMURA

This paper makes it clear by which process E. H. Erikson constructed the concept of generativity from the 1950's to the 1980's. Generativity, according to Erikson, mainly means establishing the next generation, which is ego-syntonic tendencies of the psycho-social sense of the adulthood in his theory of life cycle. Most of the recent papers about generativity give less attention to polyphonic meanings of generativity, because they discuss this conception based on each clinical interest. This paper keeps a distance from clinical interests and gives light to the process of conceptualization of generativity. From 1950's to 1960's, generativity came to mean not only procreativity, giving birth to the next generation biologically, but also teaching, At that time Erikson looked on it as the progress or the development of a society. However, through writing *Gandh's Truth* (1969), Erikson found another aspect of adulthood, not syntonic nor distonic, basic antipathies whichwas ; violence, a negative generation cycle. After *Gandh's Truth,* Erikson discussed a new meaning of self-generation which never avoid ed violence in addition to procreativity and caring. The process of conceptualization of generativity expresses the complexity of adulthood, which is contrary to the optimistic image of Erikson's theory of life cycle.